實盛

觀世流改訂謠本

内 四

二番目

實盛

八月

シテ 實盛（前ハ老翁）
ワキ 僧
ワキツレ 從僧

ワキサシ上 狂言口開アリ ヨワク
それ西方ハ十萬億土。遠く生るゝ道
ながらこゝも己心の彌陀の國。貴賤群
集の稱名の聲
ワキツレ（三人） 日ゝ夜ゝの法の場
ワキ げにも眞に攝取不捨の
ワキツレ（三人） 誓ひ誰か
ワキ 殘るべき
ワキ上歌 ワキツレ（三人） 獨なほ。佛の御名を尋ね
みん。佛の御名を尋ねみん。おのく歸る

法の場。知るも知らぬも心引く誓の
網よもるべきや。知る人も。知らぬ人をも
渡さばや彼の國へ行く法の舟うかむ
も安き道とかや浮むも安き道とかや

シテサシ上 ツヨク
笙歌遥に聞ゆ孤雲の上。聖衆来
迎す落日の前。あらたふとやけふも又
紫雲の立つぞや。鐘の音念佛の

聲の聞えば。さてハ聴聞も今なるべし。
さなきだに立ち居苦しき老の浪の。
寄りもつぎてハ法の場よ。よそてなづら
も。や聴聞せん。一念称名の聲のうち
ま。ぺ。攝取の光明曇らねども。老眼の
通路猶もつて明らならずて。よく／＼少
しハ隔てとも。こゝてきこゆることと遠かる

まづや南無阿彌陀佛、呼いふは翁。さて
も毎日の称名に怠ることなし。されば志
の者と見る所に。おことの姿餘人の見
る事なし。誰に向つて何事をと申すぞと
皆人不審しあへり。けふはおことの名
をちと名のり給へ　シテ　これは思ひもよらぬ
御尋かな。もとより處は天ざかる。鄙人

なれバ人がましやな。名もあらバこそ名
のりもせめ。唯弟子人の御下向。偏に弥陀
の来迎なれバ。かくこそ長生して。
此称名の時節に逢ふ事。盲亀の
浮木優曇華の。花待ちえたる心ち
して。老の幸身にとぞ。悦びの涙袖に
あまる。されバ此身ながら。安楽國に生るゝ

など。無比の歓喜をなまて所よ。輪廻妄
執の閻浮の名をと。又改めて名のらん事。
口惜しうこそゆへとよ　げよく翁
の申まで所理至極せりきりならぶ。つへ
懺悔の。廻心ともなるべし。唯おことが
名をなのりゆへ　さてハ名のらでハ
おならひはまじきり　なりくの事急

いで名のり候へ　シテ「さらば御前なる人を
除けられ候へ。近う參りて名のり候べし
ワキ「もとより翁の姿餘人の見ることはなけれ
ども。所望ならば人をば除くべし。
近う寄りて名のり候へ　シテ「昔長井の齋
藤別當實盛は。此篠原の合戰に討
たれぬ。きこしめし及ばれてこそ候らめ

ワキ「それハ平家の侍弓取つての名將。其
いくさ物語ハ無益。唯おことの名を名
のり給へ　シテ「いやされバこそ其實盛ハ。此
御前なる池水にて鬢髭をも洗はれ
しとなり。されバ其執心殘りけるか。今も
此あたりの人にハ幻の如く見ゆると申なり
ワキ「さて今も人に見え候か　シテ ツヨク「深山木の其

梢とハ見えざりし櫻ハ花ぞ現れたる。
老木をそれとご覧せよ　不思議や
さてハ實盛の。昔を聞きつる物語。人
のうへぞと思ひしに。身の上なりけるふし
ぎさよ。偖ハおことハ。實盛の。其幽靈
にてましますか　われ實盛が。幽靈
なるが。魂ハ冥途にあり。魄ハ此世

ゝ留りて　ワキカヽル上 猶執心の閻浮の世に
シテ 二百餘歳の程ハふれども　ワキ上 うかみ
もやらで篠原の　シテ 池のあだ浪よる
となく　ワキ 晝ともわかぬ心の闇の
シテ 夢ともなく　ワキ 現ともなき　シテ 思ひを
のみ　上歌 篠原の草葉の霜の翁さび
地 草葉の霜の翁さび〳〵なとがめそかり

そめよ。現れ出でたる實盛が。名を洩し
給ふなよ。なかなか世語も恥かしとて。御前
を立ち去りて。行くかと見れば篠原の
池のほとりにて姿は幻となりて失せに
けり幻となりて失せにけり　中入
ワキカヽル上「いざや別時の稱名にて。彼の幽靈を
弔はんと　ワキ　ワキヅレ　上歌（三人）　篠原の。池のほとりの法

の水。池のほとりの法の水。深くぞ頼む
称名の聲きこえ渡る弔ひの。初夜より
後夜に至るまで。心も西へ行く月の光
と共に曇なき。鉦打ならして夜もす
がら　ワキ 南無阿彌陀佛南無阿彌陀佛
後シテ 出端 極樂世界に行きぬれば。永く苦界を
越え過ぎて。輪廻の古里隔たりぬ。

歓喜の心いくばくぞや。所は不退の所。
命は無量壽佛とのう頼もしや。念々
相續する人は念々毎に。往生す
シテ上 南無といつぱすなはちこれ帰命
シテ 阿彌陀といつぱ 地 其行此義をもつて
ての故に必ず往生を得べしとあり
地上 ありがたや ふしぎやな白みあひ

たる池の面(オモ)に。幽(カスカ)に浮かみよる者を見
れバありつる翁なるが。甲冑を帯(タイ)する
不思議さよ　シテ「埋木の人知れぬ身と
沈めども。心の池のいひがひなき。修羅の
苦患の数〻を。浮かめてたばせ給へ
とよ　ワキ「これ程にまのあたりなる姿
言葉を。余人は更に見も聞きもせで

●小謡

シテ 〽唯老人のみ明に　ワキカヽル上 〽見るや姿も残の
雪の　シテ中 〽鬢鬚白き老武者なれども
ワキ 〽其いでたちは華やかなる　シテ 〽粧ひことに
曇なき　ワキ 〽月の光　シテ 〽燈火の影
地上歌 ●〽闇からぬ。夜の錦の直垂に。夜の錦の
直垂に。萌黄匂の鎧著て。黄金作の
たち刀。今の身にてはそれとても。何ら

寶の池の蓮の臺こそ寶なるべけれ。
げよや疑さぬ。法の教は朽ちもせぬ。黄
金の言葉多くせば。なとか至らざる
べきなとか至らざるべき。それ一念
彌陀佛即滅無量罪 まさなはち
廻向發願心。心を殘すことなかれ
時至つて今宵逢ひ難き法を受け

●獨吟語●

地中 慚愧懺悔の物語。猶も昔を忘れかねて。忍ぶに似たる篠原の。草の蔭野の露と消えし有樣語り申さん

シテ語 さても。篠原の合戦破れしかば。源氏の方に手塚の太郎光盛。木曾殿の御前に參りて申すやう。光盛こそ奇異の曲者と組んで首とつて候へ。大將かと

見ればつゞく勢もなし。又侍かと思へバ錦の直垂を著たり。名のれ名のれと責むれども終に名のらず。聲ハ坂東聲にて候と申て。木曾殿あつはれ。長井の齋藤別當實盛にてやあるらん。然らバ鬢鬚の白髮たるべきが黒きこそ不審なれ。樋口の次郎ハ見知りたる

らんとて召されしかバ。樋口参り。唯一目
みて。涙をはら〳〵と流いて。あなむざ
んやな。斎藤別當にて候ひけるぞや。
實盛常に申しゝハ。六十に餘つて軍を
せバ。若殿ばらと争ひて。さきをかけんも
大人げなし。又老武者とて。人々にあな
づられんも口惜しかるべし。鬢鬚を

墨をそめ若やぎ討死すべきよし。常ゞ
申候ひしが眞に染めて候。洗はせて
御覧候へと申しもあへず首をもち
地 御前を立つてあたりなる。此池波の岸
にのぞみて。水の緑も影うつる。柳の
糸の枝たれて 上歌 氣はれては風新柳の
髪を梳り。氷消えては波舊苔の。

●仕舞クセ

鬢鬚を洗ひて見れば。墨は流れおちて
もとの白髮となりけり。げに名を惜
む弓取は。誰もかくこそあるべけれや。あら
やさしやとて皆感淚をぞ流しける。

クセ
●又實盛が。錦の直垂を著ること私なら
ぬ望なり。實盛都を出でし時。宗盛公
に申すやう。故鄕へは錦を著て歸ると

いへる本文あり。實盛生國は越前の者
にて候ひしが。近年御領につけられて。
武藏の長井に居住つかまつり候ひき。
此度北國に罷り下りて候はゞ。定めて
討死仕るべし。老後の思出これに過ぎじ
御免あれと望みしかば。赤地の錦の直
垂を下し賜はりぬ。然れば古歌にも

もみぢ葉を（地）分けつゝ行けば錦着て。
家に帰ると人や見るらんと詠みしも
此本文の心なりされば古への。朱買臣は。
錦の袂を會稽山に飜し。今の實
盛は名を北國のちまたにあげ。かくれな
かりし弓取の。名は末代に有明の。月の
夜すがら懺悔物語申さん。（ロンギ上）げにや

懺悔の物語。心の水の底清く。濁を
殘し給ふなよ　其執心の修羅の道。
めぐりめぐりて又こゝに。木曾と組まん
とたくみしを。手塚めに隔てられし。
無念は今にあり　つゞくつはもの誰々と。
名のる中にもまづ進む　手塚の太
郎光盛　郎等は主を討たせじと

地拍子 ニニ一 ヤヲおのれ

地拍子 三二こ ヤ其後

シテ〽おけ隔たりて實盛と 地〽押しならべ

て組む所を シテ〽あつぱれ。おのれは日本

一の剛の者とぐんでうずよとて。鞍の

前輪よ押しつけて。首かき切つて捨てゝ

げり 地上〽其後手塚の太郎。實盛が弓

手よまはりて。草摺をたゝみ揚げて。二刀

さす所をむずと組んで二匹があひよ。

地拍子
ヱ二一
ヤア枯木の

どうと落ちけるが　シテ老武者の悲し
さハ　地軍にハ疲れたり。風にちゞめる。
枯木の力も折れて。手塚が下にふす所を。
郎等ハおちあひて。終に首をかきおと
されて。篠原の。土となつて。影も形も
なき跡の影も形も。南無阿弥陀佛。
弔ひてたび給へ跡弔ひてたび給へ。

文學博士 井上頼圀 本文監修

丸岡桂 本文訂正

観世清之 節附訂正

稽古摘要

習ひたる師匠	
始めたる年月日	大正　年　月　日
終りたる年月日	大正　年　月　日
稽古感想	

發行所 東京市神田區今川小路三丁目九番地

電話本局三七〇九、振替東京一三四七五

観世流改訂本刊行會

使用家の特權

観世流改訂謠本の稽古本使用家は、其内組百十番百十冊、又は外組六十二番六十二冊、又は別能組二十八番二十八冊の各一組、或は三組を悉く買ひ揃へられ候節、返送料を添へて發行所へ送附せらるれば、裝幀は無料にて五番綴の美本に仕立直し返送可申上候。かくして使用家は期せざるに一揃の五番綴謠本を得らるべく候

大正七年八月二十日印刷

大正七年八月三十日發行

大正版 一番綴

發行者 東京市神田區今川小路三丁目九番地 土居源太郎

印刷者 東京市神田區佐久間町一丁目一番地 七條愷

印刷所 東京市神田區佐久間町一丁目一番地 七條式金屬版印刷所

融

観世流改訂謡本

内 四

五番目

融（トオル）

八月

シテ　融
ワキ　僧
（前ハ塩汲ノ尉）

これは東國方より出でたる僧にて候。われ未だ都を見ず候程に。此度思ひ立ち都にのぼり候。思ひ立つ心ぞしるべ雲を分け。舟路を渡り山を越え。千里も同じ一足に千里も同じ一足に。夕べを重ね朝ごとの。夕べをかさね朝

ごとの宿の名残も重なりて。都に早く。
著きにけり都に早く著きにけり

ワキ
急ぎ候程に。これははや都に著きて候。
此あたりをば六條河原の院とやらん
申候。暫らく休らひ一見せばやと思ひ候

シテ一セイ上
月もはや。出汐になりて塩竈の。うら
さび渡る。氣色かな　陸奥はいづくはあれど

●小謡

あれど塩竈の。恨みて渡る老が身の。よるべもいさや定めなき。心もすめる水の面よ。照る月なみを數ふれば。今宵ぞ秋の最中なる。げにや移せば塩竈の月も都の。最中かな。秋は半身はすでよ。老い重なりて諸白髪

上歌 ●雪とのみ。積りぞきぬる年月の。積り

すぎぬる年月の。春を迎へ秋を添へ。時雨るゝ松の風までも我が身の上と汲みて知る。塩なれ衣袖寒き。浦わの秋の。夕べかな。浦わの秋の夕べかな。

ワキ詞「いかに。これなる尉殿。御身は此あたりの人か

シテ「さん候此處の汐汲にて候

ワキ「不思議や。こゝは海邊にても無きに。汐汲とは誤

りたる尉殿　シテ〽あら何ともなや。さて
こゝをばいづくと知ろしめされて候ぞ
ワキ〽此處こそ六條河原の院とこそ承りて
候へ　シテ〽河原の院こそ塩竈の浦候よ。
融の大臣陸奥の千賀の塩竈を。
都のうちに移されたる海邊なれば。
名に流れたる河原の院の。河水をも汲

め池水とも汲めとて。塩竈の浦人なれば。
汐汲となどおぼさぬぞや　上音 げよく
陸奥の千賀の塩竈を。都のうちよ
移されたること承り及びて候。さては
あれなるハ籬が島候か　シテ さん候あれ
こそ籬が島候よ。融の大臣常ハ御舟を
寄せられ。酒宴の遊舞様々なりし

所ぞかし。や月こそ出でゝ候へ　げによく
月の出でゝ候ぞや。あの籬が島の森の
梢に。鳥の宿し囀りて。しもんに移る
月影までも。こしうに帰る身の上かと。
思ひ出でられて候　何と唯今の面前
の氣色が。お僧の身に知らるゝとは。
もしも賈島が辭やらん。鳥は宿す池中

の樹（ワキ）僧ハ敲く月下の門（シテ）推も敲くも（シテ）古人の心（二人）今目前の秋暮にあり

（地上歌）げにや古へも月にハ千賀の塩竈の。月ハ千賀の塩竈の。浦わの秋も半まで。松風も立つなりや雲霧の籬の島隠れ。いざわれも立ち渡り。昔の跡を陸奥の千賀の浦

わきて眺めんや千賀の浦わを眺めん。

平ツ

塩竈の浦を都のうちに移されたる

いはれ御物語り候へ

シテ詞

嵯峨の天皇の

御宇に。融の大臣陸奥の千賀の塩

竈の眺望を聞し召し及ばせ給ひ。

此処に塩竈を移し。あの難波の御津

の浦よりも。日毎に潮を汲ませこゝにて

浦よりも トモ

塩を焼せつゝ。一生漁遊の便と志給ふ。
然れども其後ハ相續して翫ぶ人も
なけれバ。浦ハ其まゝ干潮となつて。
池邊によどむ溜水ハ。雨の殘りの古き
江に。落葉ちり浮く松陰の。月だに
すまで秋風の。音のみ殘るばかりなり。
されバ歌にも。君まさで煙絶にし塩

翫ぶ人も

竈の浦寂しくも見え渡るかなと。
貫之も詠めし也。げにや眺むれば。
月のみ満てる塩竈の浦寂しくも
荒れはつる跡の世までも志ほじみて。
老の浪もかへるやらん。あら昔恋しや
上歌 ●恋しや恋しやと慕へども歎けども。
かひもなぎさの浦千鳥音をのみ鳴く

融

ばかりなり音ものみ。鳴くばかりなり。

ワキ詞 いかに尉殿。見え渡りたる山々は皆名所にてぞ候らん。御教へ候へ

シテ さん候皆名所にて候。御尋ね候へ教へ申し候べし

ワキ 先づあれに見えたるは。音羽山候か

シテ さん候あれこそ音羽山候よ

ワキ 音羽山音に聞きつゝ。逢坂の。関のこなたにと

詠みたればぞ。逢坂山も。程近うこそは。らめ　仰の如く関のこなたよとは詠みたれども。あなたよあたれば逢坂の。山は音羽の峯よかくれて。此邊よりは見えぬなり　さて〳〵音羽の嶺つゞき。次第〳〵の山並の。名所〳〵を語り給へ　語りもつくさじ言の葉の。歌

の中山清閑寺。今熊野とハあれぞ
かし　さて其末つゞきたる。里一村の
森の木立　それを志るべに御覧
ぜよ。まだき時雨の秋なれば。紅葉も
青き稲荷山　風も暮れ行く雲
の端の。梢も青き秋の色　今こそ
秋よ名にしおふ。春ハ花見し藤の森

●獨吟中入マデ
●獨吟中入マデ

ワキ上 緑の空も影青き野山につゞく里は
いかに シテ ・あれこそ夕されば ワキ 野べの
秋風 シテ 身にしみて ワキ 鶉鳴くなる、
シテ 深草山よ ・地 木幡山伏見の竹田淀
鳥羽も見えたりや ロンギ上 ・ながむるやそなた
の空に白雲のはや暮れそむる遠
山の嶺も木深く見えたるはいかなる

所なるらん　シテ上　あれこそ大原や。小塩の
山もけふこそ。ご覧じそめつらめ。
尚々問はせ給へや　地上　聞くにつけても
秋の風。吹く方なれや峯つゞき西に見
ゆるはいづくぞ　シテ　秋もはや。秋もはや。半
ふけ行く松の尾の嵐山も見えたり
地上　嵐ふけ行く秋の夜の。空澄みのぼる

月影に　シテ「さて汐時もはや過ぎて

地「隙もおし照る月にめで　シテ「興に乗

じて　地「身をばげに忘れたり秋の夜の。

長物語よしなやまづいざや汐を汲

まんとて。持つや田子の浦。東からげの

汐衣。汲めば月をも袖にもち汐の。汀に

帰る浪の。よるの。老人と見えつる汐

雲にかき紛れて跡も見えずなりに
けり跡をも見せずなりにけり。（中入）

（上歌）（待謡）（ツヨク）
磯枕。苔の衣を片敷きて。苔の衣を片
しきて。岩根の床に夜もすがら。猶も
奇特をみるやとて。夢待ちがほの、
旅寝かな夢まちがほの旅寝かな

（後シテ上）（出端）
忘れて年を経しものを。又古へに帰る

浪の。満つ塩竈の浦人の。今宵の月
を陸奥の。千賀の浦わも遠き世に。
其名を遺して大臣。融のおとゞと我が事
なり。われ塩竈の浦に心をよせ。あの
籬が島の松かげに。明月に舟を浮め。
月宮殿の白衣の袖も。三五夜中の新月
の色 千重ふるや。雪を廻らす雲の袖

●獨吟留マデ

●仕舞

地「さきてや桂の枝々よ　シテ「光を花と。散らきて
粧ひ　地上「こゝも名にたつ白河の浪の
シテ「あら面白や曲水の盃　地「うけたりうけ
たり遊舞の袖　早舞 打上ウ　ロンギ上「あら面白の遊楽や。
そも明月の其中よ。まだ初月の宵々よ。
影も姿もすくなきハ。いかなるいはれ
なるらん　シテ上「それハ西岫よ入日のいまだ

遠けれバ。其影は隠さるゝ。たとへバ
月のある夜ハ星の薄きが如くなり

地上 青陽の春の始めハ シテ 霞む夕への

遠山 地 黛の色は三日月の シテ 影を

舟にもたとへたり 地 又水中の遊魚ハ

シテ 釣と疑ふ 地上 雲上の飛鳥ハ シテ 弓のかげ

とも驚く 地 一輪も降らず シテ 萬水

もよらで　鳥は。池邊の樹に宿し魚は。月下の波に臥す聞くとも飽かじ秋の夜の　とりも鳴き　鐘も聞えて　月もはや影傾きて明方の。雲となり雨となる。此光陰に誘はれて。月の都に。入り給ふ粧ひあら名殘惜しの面影や名殘惜しの面影。

文學博士 井上頼圀 本文監修
丸岡 桂 本文訂正
觀世清之 節附訂正

稽古摘要

習ひたる師匠	
始めたる年月日	大正　年　月　日
終りたる年月日	大正　年　月　日
稽古感想	

使用家の特権

觀世流改訂謡本の稽古本使用家は、其内組百十番百十冊、又は外組六十二番六十二冊、又は別綴組二十八番二十八冊の孰れか一組、或は三組を悉く買ひ揃へられし節、通運料を添へて發行所へ送附せらるれば、發行所は無料にて五番綴の美本に仕立直し、[illegible]使用家は期せずして一揃の五番綴謡本を得らるゝ[illegible]

大正六年十一月廿日印刷
大正六年十一月廿五日發行

（大正本 一冊 [illegible]）

著作權所有

發行者 東京市神田區今川小路三丁目九番地 土屋源太郎
印刷者 東京市神田區淡路町一丁目一番地 七條愷
印刷所 東京市神田區佐久間町二丁目一番地 七條式金屬版印刷所

發行所 東京市神田區今川小路三丁目九番地 電話本局三六〇九、振替東京一三四七五
觀世流改訂本刊行會

楊貴妃

觀世流改訂謠本

内 四



三番目

楊貴妃（ヨオキヒ）

八月

シテ 楊貴妃
ワキ 方士
狂言 常世の者

次第上
我がまだ知らぬ東雲の。我がまだ知
らぬ東雲の。道をいづくと尋ねん
これは唐土玄宗皇帝に仕へ申す
方士にて候。さても我が君まつりごと
正しくましますによ。色をおもんじ
艶を専と志給ふにより。容色無双の

美人を得給ふ。楊家の女なるによつて其名を楊貴妃と號す。然れどもさる子細ありて。馬嵬が原にて失ひ申して候。餘りに帝歎かせ給ひ。急ぎ魂魄のありかを尋ねて参れとの宣旨に任せ。上碧落下黄泉まで尋ね申せども。更に魂魄のありかを知らず候。

こゝは未だ蓬莱宮に至らざは程に。

道行上

此度蓬莱宮にと急ぎは尋ね
ゆく。幻もがな傳てにても。幻もがなつて
までも。魂のありかをそことしも。浪路を
分けて行く舟のほのかに見えし島
山の。草の假寢の枕ゆふ。常世の國
につきにけり常世の國につきにけり

引　急ぎ候程に。蓬莱宮につきて候。此所にて委しく尋ねばやと存候」狂言シカジカ

カカル上　有りし教に隨つて蓬莱宮に来て見れば。宮殿盤々として更に邊際もなく。荘嚴巍々としてさながら七寶をちりばめたり。漢宮萬里の粧ひ。長生驪山の有様も。これには更になぞ

らずべからず。あらうつくしの所やな。
又教の如く宮中を見れば。太真殿と
額のうたれたる宮あり。まづ此所に徘
徊し。ことのよしをも窺はゞやと存候
シテカヽル上
昔は驪山の春の園に。ともに眺めし
花の色。移れば變るならひとて。今は
蓬萊の秋の洞に。獨ながむる月影も。

濡るゝ顔ある袂かな。あら恋しの古へ

やな。ワキカヽル上「唐の天子の勅の使。方士これ

まで来りたり。玉妃かうちにましまさう

シテ「何唐帝の使とは。何しにこゝに来れる

ぞと。九華の帳を押しのけて。珠の簾

をかゝげて　ワキ「立ち出で給ふ御姿

シテ「雲の鬢づら　ワキ「花の顔ばせ　シテワキ二人「寂寞

たる御眼のうちよ。涙を浮めさせ給へぞ
地上歌
梨花一枝。雨を帯びたる粧ひの。雨を帯びたる粧ひの。太液の芙蓉のくれなゐ未央の柳のみどりもこれにはいかでまさるべき。げにや六宮の粉黛の顔色の無きもことわりや顔色の無きもことわりや。
早行
いろよ

まします時だよも（トモ）
かくおらせ……（トモ）

申上ゆ。さても後宮せまします時だよも。朝政は怠り給ひぬ。況んやかくおらせ給ひて後。唯ひたすらの御歎よ。今は御命も危く見えさせ給ひてゆ。然れば宣旨よ任せこれまで尋ね来り。
中……………………
御姿を見奉る事。唯これ君の御ところ
……………………ヲ
きし。浅からざりし故と思へば。いよく

御痛はしうこそ候へ。げによく汝が
申ごとく。今はかひなき身の露の。ある
にもあらぬ魂のありかをと。これまで尋
ね給ふ事。御情はよに似たれども。訪ふ
につらさのまさり草。枯れ〳〵ならば
中々の便の風は恨めしや。又今更の
恋慕の涙。旧里を思ふ魂を消て

〔ワキカヽル上〕「さてしもあるべき事ならねば。急ぎ帰りて奏聞（ソウモン）せん〔詞〕さりながら御形見の物をたび給へ〔シテ〕「これこそありし形見よとて。玉の釵（カンザシ）とり出でゝ。方士に與へ〔カヽル上〕たびければ〔ワキ詞〕「いやとよこれは世の中に。類（タグイ）あるべき物なれば。いかでか信じ給ふべき。御身と君と人知れず契り

給ひし言の葉ならで。それをしるし
に申すべし　げにもそれも理なり。
思ひぞ出づるわれもまた。其初秋の
七日の夜。二星に誓ひし言の葉にも
天にあらば願はくは。比翼の鳥とな
らん。地にあらば願はくは連理の枝と
ならんと誓ひしことを。ひそかに傳

へよや。さゝめごとなれども今ぞ洩れそむる涙かな

上歌

されどもよの中の。されどもよの中の。流轉生死のならひとて其身ハ馬嵬に留まり魂ハ仙宮に至りつゝ。比翼も友を戀ひ獨翅をかたしき連理も枝朽ちて。忽ち色を變ずとも同じ心の行くへならず。

終の逢瀬と頼むぞと語り給へや
きらべといひて出で母の伴ひ申し帰
るさと思ぞ嬉しさの尚いかならん
其心。われはまだ。何なくまみへ
の帯。めぐり逢せんも知らぬ身よ。
よしきらべ暫し待てありし夜遊を
なまべしげよや驪山の宮のうち。

月の夜遊の羽衣の曲　シテ「其かざし
まで舞ひしとて　地「又取りかざし
シテ「さそ袖の　地上「そよや霓裳羽衣の曲。
そよや霓裳羽衣の曲そゞろに濡るゝ
袂かな　物着　シテ上「何事も。夢幻の戯れや
地「あはれ胡蝶の。舞ならん　シテクリ上「それ
過去遠々の昔を思へば。いつを出生

●獨吟サシクセ

の始を知らず　未来永々の流転。更に生死の終もなし　●然るに二十五有のうち。何れか生者必滅のことわりに洩れん　先づ天上の五衰より須弥の四洲の様ゞに。北洲の千年終に朽ちぬ　況んや老少不定の境歎の中の。歎とかや　●われもその

●仕舞

おもへば上界の諸仙たちが。往昔のちなみありて。かりに人界に生れきて。楊家の。深窓に養はれ。いまだ知る人なかりしに。君きこしめされつゝ。急ぎ召し出し。后宮に定め置き給ひ。偕老同穴の契たらひも縁つきぬれば いたづらに。又此島に唯ひとり。帰り来

りてすむ水の。あはれはかなき身の
露の。たまさかに逢ひ見たり。静に
語れ憂き昔　さるにても思ひ出
づれが恨ある　其文月の七日の夜。
君とかはせし睦言の比翼連理の
言の葉もかれぐになる私語の。
さゝの一夜の契だに。名残は思にならひ

あるよ。まして や年月馴れて程ふる
世の中よ。さらぬ別のなかりせば。千
代も人は添ひてましよしそれとても
遁れ得ぬ。會者定離ぞと聞く時は。
逢ふこそ別なりけれ。羽衣の曲　序之舞

シテワカ上
羽衣の曲。稀にぞ返すをとめ子が

地上　打上頭ニ付
袖うちふれる。心あるや。こゝろある

しや戀しき昔の物語
地 戀し
き昔の物語。盡きぬ月日も移り
舞の。しるしの釵又賜りて。暇
申してさらばとて。敕使は都に帰り
ければ
シテ さるまでもさるまでも
地 君は此世。逢ひ見んことも蓬が島
つ島。浮世なれども戀しや昔。はかなや

別の。常世の臺よ。うし沈みてぞ
留りける

文學博士 井上頼圀 本文監修
丸岡桂 本文訂正
観世清之 節附訂正

稽古摘要

習ひたる師匠	
始めたる年月日	大正　年　月　日
終りたる年月日	大正　年　月　日
稽古	
感想	

使用家の特権

観世流改訂謡本の稽古本使用家は、其内組百十番百十冊、又は外組六十二番六十二冊、又は別能組二十八番二十八冊の各一組、或は三組を悉く買ひ揃へられし節、返送料を添へて發行所へ送附せらるれば、裁切外は無料にて五番綴の美本に仕立直し御返送可申上候。かくして使用家は期せざるに一揃の五番綴謡本を得らるべく候

大正七年十月三十日印刷
大正七年十一月六日發行

大正版 一番綴

著作権所有

發行者 東京市神田区今川小路三丁目九番地 土居源太郎
印刷者 東京市神田区佐久間町一丁目一番地 七條愷
印刷所 東京市神田区佐久間町一丁目一番地 七條式金属版印刷所

發行所 東京市神田区今川小路三丁目九番地 電話本局三六〇九、振替東京一三四七五
観世流改訂本刊行會

岳雲